

編 集 後 記

ある相撲の師匠が、人気に陰りが出たり新弟子の入門が躊躇されたりする最近の風潮を憂いて、相撲界を立て直すための思いを綴った。その師匠は「信念の指導を貫かねばと自分に言い聞かせている」とのことである。入門希望者の親にありのままを見てもらう方針として、稽古では厳しく怒鳴ったところ、終わった後で父親が「今日の稽古を見て、安心しました」と言った。「稽古は厳しいです。間違ったときは怒ります」という指導方針を入門希望者の親に理解してもらいほっとしたそうである。

同様に私たちは消化器外科を志す若手医師の指導にかなり気を遣う。志望者が殺到する一部の恵まれた施設は例外として、多くの施設では金の卵さながら若手医師の教育をしているはずである。その時、厳しくすべきか、甘くすべきかというジレンマに陥る。一人前の消化器外科医になってもらいたいと願って過剰な指導を行うと、若手医師が外科から逃げ出してしまわないかと心配になる。しかし、手術を中心とした治療医学である外科では、妥協が許されない医療行為が多々ある。「指導は厳しいです。間違ったときは怒ります」という姿勢で若手医師に接することにより、安全で質の高い外科診療が実践できる優秀な若手医師が育つはずである。私が研修を受けてきた施設では、外科は運動部に似ていると言われていた。いろいろな解釈が可能であるが、相撲の新弟子教育と若手医師の教育には通じるものがある。ただし、どちらの場合でも厳しい教育だけでは若手は誰もいなくなってしまうので、愛情も兼ね備えた指導が肝要であろう。

ところで、日本消化器外科学会雑誌の投稿論文を査読していると、内容は言うまでもなく表現力もすばらしい論文に接することがある。執筆者の能力が優秀であることは明白であるが、共著者の指導も欠かさない。執筆者がこれまでに受けてきた教育や、現在指導を受けている環境がすばらしいに違いない。一方、未完成な論文にも接する。忙しい臨床の合間に仕上げた貴重な論文であるはずで、私は何とか質の高い論文に仕上げ、本誌に掲載されるように教育的な査読を心掛けている。編集委員として時には厳しいコメントも付けるが、それは論文執筆を通じて多くのことを学んでほしいと思うからである。本誌が消化器外科医にとって有用な論文が満載された雑誌となるように、これからもお手伝いしていきたい。

(小澤壯治)